In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	(第 3 章)吉沢英明氏の人と仕事
Author	高橋 圭一
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 34 巻, p.49-65.
Published	2022-03-15
ISBN	978-4-904010-49-5
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	上方・大阪都市文化の研究拠点形成 ： 大学アーカイブの整備と発信
DOI	10.24544/ocu.20220516-012

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

第 3 章

吉沢英明氏の人と仕事

高橋 圭一

（事前に配布した発表資料《若干の修正を施した》の間に、当日加えたコメントを挿入した。ゴシック体で表記しているのが、コメントである。）

＊吉沢氏の「吉」の表記は正式には「吉」であるが、氏の著書ではすべて「吉」で統一されており、本稿で引用した文章もほぼ「吉沢」としているため、以下本稿では「吉」と表記した。

○　吉沢氏の履歴

昭和 11 年（1936）7 月埼玉県原市町（現上尾市内）生まれ。

現在八十五歳、今も上尾市在住です。講談に関心を抱いたのは、中学生の時にラジオを聴いてから、だそうです。国学院大学在学中に講釈場に通うようになり、五代目神田伯山先生に傾倒されました。講談の大ファンになったのです。

昭和 34 年 3 月、国学院大学文学部史学科卒。卒業後は郷里で日本史の高校教師に。昭和 43 年神田村の「古本大学」に入学。（この年、夜間部に望んで異動。）

吉沢氏は空いた昼間の時間に、毎日神田の古本屋街に通い、速記本等の講談資料を買い集めました。講談ファンにとどまらず、氏はコレクターとなりました。

10 年余り夜間部に勤務し、後半は東京大学明治新聞雑誌文庫、同新聞資料センターに「通勤」。同文庫・センターには 10 年近く通い、講談資料の「発掘」に努める。

ファン、コレクターであると同時に、研究者になったわけです。

二十代の時、五代目神田伯山を敬慕し、以後、講談等大衆芸能に関するあらゆる資料を収集。退職後は、その山の中で、著述に専念する。

○　**吉沢氏の仕事**

氏には 20 点ほどの編著書がありますが、できるだけ紹介したいと思います。

吉沢英明氏の仕事を通覧して短くまとめると、「徹底して現物にこだわって、事実を追求した、基礎研究」と言える。もう少し具体的に述べると、「講談目録（カタログ）、講談史、講談事典」が氏の研究の三本柱。

1●**『講談関係文献目録―明治・大正編―』**恐らく氏の最初の編著です。

昭和 51（1976）年 1 月刊、A5 版　134 頁　私家版

氏の編著はすべてＡ５版、私家版（自費出版）ですので、以下では省略します。

❖序文「速記本（講談、人情咄）蒐集の意義」　東京大学助教授　延広真治 2500 字余より。

延広氏の文章は序としてはかなり長く、内容も示唆に富んでいて一読をお勧めしますが、今日は最後の一節のみ紹介します。

もし速記本を蒐集し一ケ所に保存する事ができるならば、その恩恵ははかりしれないものがある。

大阪公立大学が吉沢氏の蔵書を一括して保存することとなったのは、まったくすばらしいことです。

吉沢英明氏は自ら進んで定時制高校に職を奉じ、連日東京を中心に古書店をあさり、休暇には全国の古本屋を周ねく探索する一方、販売目録を悉皆とりよせて、貴重な文化遺産たる速記本の蒐集に全身全霊を打ちこんでおられるのである。明治新聞雑誌文庫を残した宮武外骨に対してと同様の畏敬の念を禁じ得ない。

目次

延広氏序文

講談界昔話　その一　　芹沢心道　明治 35（1902）年生まれの講談師

昭和 33（1958）年に引退し、当時埼玉県在住。

その二　　〃

その三　　〃→『桃川東燕昔日譚』昭和 52（1977）年刊。未見。

『桃川東燕昔日譚（続編）』昭和 53 年刊。

桃川東燕は芹沢心道の最後の芸名です。『昔日譚』の正編を読んでおりませんので、紹介はできません。

講談関係文献目録　　分量からして、本書のメインはこちらです。

凡例（冒頭「一　本目録は昭和 50 年 8 月現在、吉沢英明蔵書のうち、明治大正期の講談関係文献を分類編集したものである。」下略。（講談本で七八百冊））

第一冊目にして、吉沢氏の編著の特色が色濃く表れています。自分の蔵書で以て本を編む。講談本（単行本）のみならず、新聞や雑誌、江戸期に出た講談の種本である実録や、人気番付の様な史料も含む、といったことです。

一、新聞雑誌　　明治編

〃　　大正編

二、講談本　　明治編

〃　　大正編

三、読物実録本

四、番附その他一枚刷

五、講談参考文献

２●『講談資料集』

昭和 51（1976）年 11 月刊　158 頁

❖「はしがき」より。

本書は明治期の新聞雑誌を中心に、比較的珍しい講談に関する資料を一本にしたものである。もとよりこの種の文献には彼我の表現に若干の相違があり、厳密な意味での資料としては不満であるかも知れない。然し我々はこう云った資料を出来るだけ多く発掘し、再評価することによって、より正しい講談

史をつくらねばならないと考える。

収録された文献は、厳密な意味で資料とはしがたいものの、こういうものも含めて、「講談史」を構築せねばならない、と主張されています。

目次

はしがき

一、釈師列伝―「寄席の楽屋」より

二、邑井一資料抄

三、松林伯知資料抄

四、如何にして講談師と成りし乎

付録㈠　廿五年前の講談界

㈡　故蓁々斎桃葉

㈢　神田松鯉高座六十一年

㈣　残った講釈場へ行った記

３●『講談明治編年史』

昭和 54（1979）年 3 月刊　235 頁

本格的な講談史です。明治・大正・昭和（前中後）の全５冊から成ります。全冊の前書という性格もありますので、少し長く引用します。

❖「まえがき」より。

…私は明治の盛業たる講談の具体的様相を知るべく、東京大学明治新聞雑誌文庫にて過去二年間ほゞ連日多数の新聞を見てきた。而して数千点の関係記事を確認したのであるが、その内、信用度の高いと思われるもの千五百点を選んで本書を構成した。題して講談明治編年史という。元より新聞報道即真実というわけにはいかぬ。誤報もあろうし、記事にならなかった重要事件があったかも知れない。またさゝやかな一個人の調査である、重要記事の見落しも考えられよう。…有名無名の釈師が無数に登場する本書によって「講談」を再認識して頂ければ幸甚である。

❖「編集後記」より。

数年前のことである。偶々延広真治氏と雑談した折、明治新聞編年史や

風俗逼年史の類があるのに、芸能編年史がない、落語でも講談でも誰かやらぬものかなあ――と言われたことがある。又当時講談本の夢中男だった私に同情してか、何も買うばかりが能ではない、是非明治文庫を利用すべきであると、再々のお勧めを受けていた。

大川屋本をもって代表とする講談本の初出は明治の新聞雑誌にあり――こうにらんでいた私は早速同氏から紹介して頂き、…文庫に「通勤」した次第である。

❖「凡例」より。

一本書の各項は次の各紙から収録した。

として、以下、東京発行紙 46 紙、大阪発行紙 12 紙、京都発行紙 6 紙、名古屋発行紙 8 紙、其の他地方発行紙 44 紙を挙げる。

4●『講談大正編年史』

昭和 56（1981）年 1 月刊　243 頁

❖「まえがき」より。

（発表の際には時間の都合で略しましたが、この期の講談史で最も重要な事柄を押さえてくれている、と思います。）

かって荷風散人は雑誌娯楽世界に「築地草」を連載し、大正期の講談界を活写したことがある。この期の新聞には中央紙、地方紙をとわず講談速記が無数にあり、それが一度評判となるや活動写真にも演劇にもなった。また一人次郎長伯山ばかりでなく実に多くの講談師が全国いたる所、口演の旅を続けていた。故に講談は大正期においても民衆娯楽の雄として、一般社会から極めて高い評価を得ていたことになる。

「凡例」によれば、東京発行 20 紙、大阪発行 7 紙、其の他 27 紙が挙がる。

5●『講談昭和編年史・前期』

昭和 62 年（1987）12 月刊　243 頁

昭和 56 年から 62 年まで、かなり間が空いています。その理由については、前著「大正編年史」の「まえがき」に 55 年 4 月に全日制高校に戻っ

たことが書かれています。

❖「まえがき」より。

本書は既刊の「講談明治編年史」（昭和 54 年）「講談大正編年史」（昭和 56 年）の続編にして元年から二十年までの新聞記事を集めて一本としたものである。

この期は次郎長伯山、三馬術の伯鶴、義士伝で知られる貞山の三大巨人、ならびに伯山四天王といわれた伯龍、ろ山、山陽、伯治の最も活躍した時代である。また戦後の講談界に大きな足跡を残した伯山（当時五山）、馬琴、貞丈、貞山（当時貞鏡）の青壮年期にも相当する。本書によって激動期の講談界の状況が具体的に理解されれば幸いである。

「凡例」に拠れば、東京発行 12 紙、地方発行 16 紙、旧植民地発行 5（台湾、上海、京城、満州 2 紙）。

6●『講談昭和編年史・中期』

1989 年 2 月刊　245 頁

❖「はじめに」より。

本書は昨冬刊行した「講談昭和編年史・前期」に続くもので、21 年から 45 年まで 25 年間の記録である。

この期には敗戦の混乱にもかかわらず、上野広小路に本牧亭が開業（復活）、そして民間放送の誕生により日常的に多くの講談が全国隅々にいき届いたこともあった。（この後、吉沢氏の中学時代の講談体験あり。）

ここまでの『編年史』により（後期は平成 3 年刊です）、平成 2（1990）年度人文科学協会賞（京都大学人文科学研究所）受賞。

7●『講談昭和編年史・後期』

1991 年 4 月刊　253 頁

❖「はしがき」より

本書は昭和の後期、即ち 46 年から 64 年 1 月まで 18 年余の記録である。

この期には斯界の長老服部伸、神田伯山、宝井馬琴の各師が相次いで没している。また講談界の分裂につぐ分裂、そして大合同、加えるに女流講談の台頭など何かと話題の多い時期でもあった。

この編年史５冊は、講談史について何か書こうとする際には、たとえ短いものであっても、参照しないわけにはいかない、そういう本です。

８●『講談・落語等掲載所蔵雑誌目次集覧―大正期―』

1994（平成 6）年 3 月 20 日刊　103 頁

❖「発刊にあたって」より。

本書は大正期の所蔵雑誌 101 種・845 冊をアイウエオ順に列記し、それ等に収録された講談・落語の演題、演芸記事等を目次から抄出したものである。

編者は、既に昭和 51 年１月に「講談関係文献目録」―明治・大正編―（このプリントの１です）を私刊しており、類似出版の積極的意図はなかった。しかし二十年近く経過し、蔵書も倍増している筈である。また山本進氏の熱心なお勧めがあり、…初めて本書が誕生したという塩梅である。

奥付の経歴に「高校教諭を勤めたが現在諸芸懇話会会員」とあります。この年までに退職されていたようです。（追記　55 歳で退職されたそうです。）この後、氏の著作のペースは格段に速くなります。

９●『講談明治期速記本集覧　付落語・浪花節』

1995（平成 7）年 4 月 1 日刊　413 頁　　これまでで最も厚い本です。

❖「推奨のことば」宝井馬琴（注　六代目　2015 没）より。

氏は講談を愛して三十年、文献的収集と研究に熱中されるのみならず、実によく講釈場に足を運んで下さり、これほど熱心に聞いてくださる常連さんは皆無である。

最初の氏の履歴のところで、氏が講談の大ファンとなったと申しましたが、そのことはずっと変わりませんでした。

❖「発刊にあたって」より

本書は所蔵文献の内明治期に刊行された講談速記本を五〇音順に列記し、各々に多少の書誌的解説を付したものである。その大要は凡そ次の如くである。

甲　基本文献（各種の速記本）――「2681 点」

一、新聞連載切抜綴本、新聞附録冊子――「480 点」

二、雑誌連載、雑誌附録切取綴本――「60 点」

三、単行本――「2059 点」

四、新聞一枚物（原紙の儘バラで保存）に掲載された速記類――「82 点」

各項には一部の書き講談ならびに共通の演目の多い浪花節、落語速記を含む。一と二は旧蔵者の自家製本。他に各種の雑誌を蔵するが、単行本の紹介が主眼であるから詳しくは延べない。

乙　二次的文献（前項の内容を理解するのに参考となり得る同期の単行本類。）「395 点」　中略

氏が集めたのは単行本だけではありません。新聞連載切抜綴本、新聞附録冊子は読者が自分用に手作りしたもので、見た目は埃っぽくて薄汚い古新聞に過ぎません。そういうものの資料的価値を熟知して、吉沢氏は収集しておられました。なお、乙は講談本ではありませんが、素材が講談と共通するものです。

元来講談は釈場で聞く都市の芸能であったが、明治に入るや新聞雑誌を通して読む芸能として全国を席捲した。また連載完結後は直ちに単行本となり、地方で営む貸本屋の大歓迎を受けたのも事実だ。大川屋に代表されるいわゆる〃赤本〃がこれである。

しかし速記本は娯楽の多様化によって読み捨てられ、その上本自体が酸性劣化で雲散霧消の運命にある。僅かに三千余点の紹介であるが、実際は

この何倍、何十倍の講談文献が刊行されたと考えて誤りあるまい。　下略

講談速記本とはいかなるものか、吉沢氏が端的にまとめられた文章です。最後の「この何倍、何十倍の講談文献が刊行された」というのは事実でしょうが、講談のネタが、ここに挙がっているものの何倍・何十倍もあったわけではありません。

速記本の最後には、本屋の発行書目録がよくついています。そこには速記本とは書かれておらず、「講談小説」或いは単に「小説」とされるのが常です。「明治時代に『小説』と言うと、講談速記本のことですよ」、と吉沢氏から教わったことを覚えています。

❖「あとがき」より。

…「新聞講談」は全くの未開拓、殊にあれほど盛んだった講談附録の具体的報告は皆無である。大昔、前田愛氏（立教大）から新聞関係の詳細な調査を強く勧められたが、今日迄そのご教示が念頭から離れることがなかった。幸い本書によって一般読物も含め全国各地の新聞附録と連載物の現物六百余点を紹介することが出来、責任の一端を果したと自負する次第である。

10●『二代松林伯圓年譜稿』

平成 9 年（1997）２月 8 日刊　171 頁

二代松林伯圓は、明治時代に三遊亭圓朝と人気を二分した演芸界の大立者です。

❖「凡例」より。

一、本稿は初代の生誕から二代目死後の「事件史」迄およそ一三〇年間の記録をもって構成した。

文化 9 年（1812）～昭和 15（1940）年までです。最後の記事は伯圓の弟子悟道軒圓玉の死です。（本書 25 頁参照。）

一、使用した資料は原則として当時の新聞・雑誌・速記本の類であるが、各項文末に（　）してその出典を明記した。

11●『松林伯圓作品集』【一】

平成 10（1998）年 2 月 8 日刊　165 頁　　伯圓作品の梗概を記したものです。

❖「凡例」より

一、伯圓の作品は五十音順に配列して演題名には●を冠した。

一、共通の素材を扱った他の演者による作品は、伯圓の次に列記して▲を冠した。

一、●▲共に各々の速記を要約したものであって、出典は文末に≪　≫で示した。

伯圓のみならず、他の講談師の演じ方も知ることが出来るわけです。

本叢書は伯圓作品を網羅的に紹介する事を主眼とし、【二】以下も順次刊行する。

10 冊刊行する予定だったようです。

目次　凡例　安政三組盃　飯岡助五郎　大久保彦左衛門　大久保武蔵鐙　鏡山　茅野三平　関白秀次　雲霧仁左衛門　芸妓の操　孝女花扇　小猿七之助　小雀吉五郎　山谷の雪　佃の白浪　つゞれの錦　天保六花撰　鳥追情史（阿古代・源三郎）　春の山雀　目出鯛　雪振袖　雪夜情誌　洋婦の幽霊

〇特別寄稿　「松林伯圓と筒井政憲」　中込重明（同氏『明治文藝と薔薇　話芸への通路』右文書院　2004 年刊所収）

中込氏は落語・講談の優れた研究者でしたが、残念なことに夭折されました。

12●『松林伯圓作品集』【二】

平成 11（1999）年 1 月 30 日刊　119 頁

目次　凡例　嘘つき弥次郎　小栗判官　菅公　源三位頼政宇治の血戦　源三位頼政の最期　高嵩谷　助六伝（助六の実録）鼠小僧次郎吉

〇特別寄稿　中込重明　「松林伯圓を巡る人々―高野長英・遠山左衛門尉景元ほか―」（前掲『明治文藝と薔薇　話芸への通路』所収。）

同　神田翠月　翠月師の文章中「さて、吉沢氏は十年計画とかで、伯圓の

作品を網羅的に紹介することを悲願となさっていると聞いております。」

13●『講談明治期速記本集覧　二輯』　　ア～カ迄です。

平成 12（2000）年 2 月 8 日刊　141 頁

（吉沢氏の私信には「ワ行迄は五輯かかる」と。また「（仮）講談作品小辞典は五百作のあらすじを載せる予定だが、二百に達した」、とありました。）

この後の『講談作品事典』に、興味の中心は移っていかれていたようです。当初の『事典』が、代表的な作品の梗概のみを記すおつもりだったこともわかります。

❖「序」　中込重明　より

我々が、まず知りたく思い、しかも常々関心を寄せるのは、一表現者がどう思ったかという事よりも、圧倒的に事実の記載であり、往々にしてその事実の列挙である。

独創的なるものは、この先の産物であり、地味だが堅実な基礎作業を礎にせねば成らぬ代物である。

前出中込氏の推薦文です。私が最初に吉沢氏の仕事を通覧して短くまとめると、「徹底して現物にこだわって、事実を追求した、基礎研究」と言えるとしたのは、中込氏のこの文章にほぼ拠ったものです。

❖「あとがき」より。

本書は既刊書（平成 7・3 刊）の続編であるが、三輯（キ～）以下も順次刊行する予定である。

14●『演芸界面白噺』

平成 13（2001）年 1 月末日刊　131 頁　70 部限定。

❖「発刊の趣旨」より

本書は広く演芸愛好者、寄席ファンに面白く読んで頂くための各種資料を収録したものである。従って学術研究の参考文献となり得ぬことは当然であろう。

とは申せ、明治～大正期の芸能界の実態が面白く生き生きと描かれてお

り、虚実ない交ぜの部分は遺憾であるが、概ね一つの世相史として理解できる。

冒頭「演芸愛好者、寄席ファンに面白く読んで頂く」で始まり、これまでの吉沢氏の編著とは少々印象を異にしますが、やはり歴史を知るための資料と捉えられており、根底は変わりません。

❖「凡例」より。

明治期2点、昭和戦後期1点」を除けば全て大正期の雑誌である。

目次　古今講談師譚（空板生　本文より）、東京趣味と大阪趣味（在大阪東西閑人）、京都の寄席（瀬戸閻太郎）、鹿釈往来（孔雀舟）、温泉場（辰巳老人）、浪花節論（市村俗仏）、寄席がき（与二郎）、寄席見物記（相楽地水）、寄席の研究（なし）、芸壇の名物競べ（歌川飛燕）、台本としての講談雑話（活動写真）（吉山旭光）、落語家花形九人揃ひ（成田小僧）、色物寄席掻記（丁字楼）、浪花節銘々伝（黒風白雨楼主人）、悟道軒茶話（抄録）、講談生活五十年（神田伯鱗）、追加（月刊誌・娯楽世界より）。★特別付録・折り込み「明治二十五年改正・東京浪花節競」（カラー版）

このプリントの8は『講談・落語等掲載所蔵雑誌目次集覧―大正期―』でした。大正期の雑誌を、演芸記事を求めて渉猟した第一人者である吉沢氏が、選りすぐった「面白噺」です。講談・落語に加えて浪花節、さらに娘義太夫の噂等も含まれます。氏の本は概ね稀覯ですので、長くなりますが目次を全部載せました。

15●『続　演芸界面白噺』

平成14（2002）年3月1日刊　155頁

目次　講談としての世話物（辰巳の老人）、講談ネタグラシ（辰巳老人）、宝井馬琴――落語講談名家かがみ（四）（からいた）、高座の癖（森暁紅）、評判名家選（講談・落語）（上）（森暁紅）、評判名家選（講談・落語）（下）（森暁紅）、大阪の落語界（暮秋楼）、名人・非名人（大阪芸人の面影）（古井斤一）、落語研究会（やもじ（投））、当代落語家三十人（正岡楓峡）、寄席廻り（芝廼舎僊士）、

寄席集（注、筆者名を記さない）、寄席と芸人（鬼太郎）、不器寄席物語（鬼太郎）、高座外の浪花節芸人（なし）、桃中軒雲右衛門（石原松渓）、雲入道気焔縦横（市村俗仏記）、イカサマ征伐―二代目雲右衛門問題（かおる生）、芸談一声（雲井不如帰）、浪花節短評（中村泰治）、浪界駄言（渚の人）、浪界落書（風来神）、復活したる巴右衛門（九州浪人）、清翁と昇之助（相楽地水）、東都娘義太夫（礫川生（投））、筑前琵琶の今昔（鈴木旭秋）、一月に於ける横浜の演芸界（横浜　山野芋作（投））

16●『演芸界面白噺（三）』

平成16（2004）年8月吉日刊　136頁　　同封の私信（この本と一緒に送られてきた手紙です）に「現在講談作品小辞典（仮題）二六〇余点脱稿、五百がめど」とあります。また「毎日午前三時前に起きて（あらすじ書きを）終日やっており体クタクタにつき失礼します」とも。

私が直接伺った際には午前2時に起きる、と言っておられたように記憶します。就寝は午後7時です。夜中に起きて、午後には健康維持のためにサイクリングをする。時折寄席に行く（どれくらいのペースであったかは存じ上げません）以外は、ほぼ自宅に引きこもって、御自分が集めた文献を読み粗筋を取る、そういう生活を15年以上続けられました。

目次　　釈界回顧録（山の手の鳥）、大道講釈（辰巳の老人）、講談界の二変人（辰巳之老人）、講談を聴く心持（春波生）、泥棒伯圓（近世名人評伝　三）（鬼太郎）、伯山が治（ママ）郎長か治郎長が伯山か（暁紅）、講談師小伝（講談落語集）筆者名ナシ、落語家小伝（講談落語集　単行本）（筆者名ナシ）、円朝の話（近世名人評伝）（鬼太郎）、講釈師の耳で聴いた名人三遊亭円朝の人情噺　恰も今年の二十五回忌に因みて（悟道軒円玉）、合同演芸界を聴く（三遊・柳）（三月二日・変生）、春風亭小柳枝（落語家真打月旦）（野寺吉之助）、三語楼の芸風（席亭人気者）（しょうぞう）、落語与太話（桂三五郎）、吉田奈良丸（浪界評論）（狭山孤影）、若返った雲右衛門（紫頭巾）、鼈甲斎虎丸の印象（豪放と清艶を兼ね備へし芸術である）（紫頭巾）、伊藤高麗右衛門の意気（春野若草）、雲月君足下（浪界の現状を論じて足下の活躍を促す）（黒装束）、浪花節噂の聞書

き（浅香紫葉）、女義太夫楽屋の繰言（上下閑人）、当世癖さがし（なし）、滑稽競（１）（丁字舎）、滑稽競（２）（丁字舎）、大入場（１）（おに）、大入場（２）（おに）、全く情けなくなる＝山の手の寄席＝（佐藤鳴皐）、大阪もの、浅草を笑ふ（三土半也）、浅草与太ある記（島川七石）

17●『続講談明治期速記本集覧』

平成 16（2004）年 8 月 15 日刊　483 頁　「ア」から「ワ」迄。

❖「あとがき」より。

本書は次の各書の続編で四冊目に相当する。即ち

「講談明治期速記本集覧」（平成 7・4・Ｉ　このプリントの 9 です。）

「講談明治期速記本集覧」二輯（平成 12・2・8　このプリントの 13 です。）

「講談明治期速記本集覧」三輯（未刊）

以上に続き、要領は全て既刊書の通りである。いさゝか特色を記せば全国各地の新聞連載や附録類を紹介したこと、明治～昭和戦前期の雑誌より関連記事を注記したことであろう。一年後に「続々明治期速記本集覧」も刊行するが、とにかくこの種の文献は無尽蔵、完璧を期することは到底不可能といわざるを得ない。が、さゝやかな本書に触発されて真の研究者が一日も早く誕生することを切望する。

「続々集覧」は刊行されませんでした。原稿は用意されていたはずですが。このような目録を作るのであれば、どこかで一度集書を止めて、その時点で持っている本で作成しなければいけないでしょう。ところが、吉沢氏はどんどん蔵書を増やしてしまう。ですから、しばらく時間が経つと新たなリストを作るという作業の繰り返しになってしまいます。後進にとってはちょっと使いにくいところがあるのです。全部読めばいい、と言ってしまえばその通りなのですが。

波線部の最後で、吉沢氏は自分の仕事は基礎研究であって、これから「真の研究者」が誕生することを切望しておられます。

18●『講談作品事典』（上　ア～コ）（中　サ～ノ）（下　ハ～ワ、追録）

平成 20（2008）年 10 月 1 日（三冊同時刊）1895 頁

❖（序）「未曽有の快挙」三代目・神田松鯉（現・人間国宝）より。

「項目の数にも目を見張るが、適切な解説は収集された速記本や各種資料をすべて読破して、頭に入っていなければできない仕事である。」

この『事典』のとりわけ「解説」の値打ちについては、講談師である旭堂南海先生に、補足して頂きたいところです。

「決・定・版」　高橋圭一　「吉沢さんは大衆芸能史料の、人も知る一大コレクターである。いや単にコレクターと称するのは適切ではない。吉沢さんは収集自体を目的としているわけではなく、その膨大なコレクションを実に丹念に読みこんでおられる、稀有な研究者である。…頂戴したお手紙から引かせていただくと、「できるだけ正しいと思われる速記を正確に読んで粗筋（あらすじ）を記」されたとのこと。「正しい」とは、そこに名前の書かれている講談師が実際に口演したと考えてよい（そうでない場合が甚だ多いことは、吉沢さんに実物教育を受けた）、の意である。看板に偽りのない速記本であると、吉沢さんが保証してくれているのである。「正確に読んで粗筋を記す」ことは、想像以上の難事である。

❖「凡例」より。

一、明治～昭和期を中心として各種講談（見出しのみ入れて 4,750 余）を五十音順に列記した。

二、各項共原則として梗概＝演者名、出典（単行本には「　」、新聞名には<　>、雑誌名には“”を加えて巻号数も記す）、刊年月、補足（※の部分。無いのもある）の順に記した。

七、速記者名はすべて記さない。いわゆる書き講談、架空講談師の類も収録した。

一四、編者の所蔵する新聞、雑誌等のみを使用したが、本書で講談作品のほゞ

全容が理解できる筈である。

❖書評『國文學　解釈と教材の研究』平成 21（2009）年２月臨時増刊号　鈴木圭一　より。

私家版の書評は珍しいと思います。鈴木圭一氏は近世文学の研究者で、落語・講談に造詣の深い方でした。

明治以降の事例をもう少し記そう。「浮城物語」「義血侠血」をはじめとする小説を題材にしたものの項目があり、「仮名垣魯文」・花袋（←「石見武勇伝」）・馬場孤蝶（←「渋川伴五郎」）・金子光晴（←「三方が原の合戦」）など作家と講談の関わりも当然書かれる。また「乃木大将」・「東郷平八郎」・「児玉将軍と掏摸（すり）」といった時の軍人、下って「工場も闘う」はじめ第二次大戦時の時局ものも立項され、…ほかに「レ・ミゼラブル」「人肉質入裁判」「白野弁十郎」など多くの洋物、「宋朝水滸伝」「三国志」など中国種も当然扱う。…『事典』の収録の幅の広さを賞賛しています。

最後に、吉沢氏はただ詳しいのではなく講談をこよなく愛している、ということをあらためて記しておきたい。「し」の項目最初に神田茜の現代講談「幸せの黄色い旗」を掲げられていることがそれを端的に示す、と私は思う。

神田茜師は当時まだ若手の女流真打でした。氏は茜師のネタを講釈場で聴いて、事典に載せたのでしょう。鈴木氏が言われる通り、ずっと講談ファンだったのです。

19●『講談作品事典　続編』

平成 23（2011）3 月 1 日刊　795 頁

同封の私信に「伸の芋作時代の新講談、佐野孝の書き講談、浪曲等が中心です。　コピーの如く「大衆芸能図録」に関心を移しています。「続々編」目下 200 字×2400 枚程度、ン年後に私刊予定です。」

『続々編』は刊行されませんでした。

❖「凡例」より。

一、要領は正編と同一であるが、講談と関係ある浪曲、それに新講談、書き講談の類を中心とし、五〇音順に列記した。

吉沢氏は自ら集めた膨大なコレクションを、驚異的な持続力で丹念に読み続けた人である。このコレクションが公開された暁には、各自の問題意識に従って、いろいろな使い方がなされるだろう。が、閲覧される人たちの中に、吉沢氏のように、片っ端から読みふける人も現れて欲しいと思う。

私は個人的に、若手の講談師に大いに読んで欲しいと思います。

吉沢氏には、以上に上げた以外にも多くの著述が有ります。

その他●『大衆芸能資料集成』（第5巻・三一書房　1981年　21作の吉沢氏架蔵の速記本の活字化、及び解説）、『日本芸能人名事典』（三省堂　1995　執筆者名はなし）、『講談五代目寶井馬琴名演集（ソニー　架蔵はＣＤ11枚組）』「別冊解説書」所収「講談の歴史」、さいたま市立博物館　第30回特別展「足踏みオルガンがやってきた！唱歌から浪花節まで・うたをめぐる近代史」平成18（2006）年　図録Ⅲ章「語り物の引力―浪花節の大ヒット」。『日本古書通信』『上方芸能』『講談研究』『諸芸懇話会会報』『民俗芸能』『山陽（改名して山翁）えくすぷれす』『PAPAN』『月刊浪曲』等に珠玉の大量のエッセイあり。

上記には稀覯の小冊子も含まれており、私が読んだのは一部に過ぎないでしょう。

吉沢氏の学問、「吉沢学」を極める為には、是非その全容を知りたく思います。